

## 指定文と同定文の疑問形 <qui est NP?>

藤田 康子

### 0. はじめに

<qui est NP?> は、人について問うときに限って用いられるコピュラ文の疑問形である。コピュラ文については、Declerck (1983, 1988) の分類を発展させた論考に東郷 (2005) があり、意味論的・語用論的観点から仮説を提案している。本稿は、東郷の仮説を援用し、<qui est NP?> の成立要因の一端を明らかにすることを目的とする。

### 1. Declerck の分類

Declerck (1983, 1988) はコピュラ文 NP<sub>1</sub> be NP<sub>2</sub> についてつぎの4つの分類を提案している<sup>(1)</sup>。

#### 1. 指定文 *specificational sentences*

定義：変項 NP<sub>1</sub> に値 NP<sub>2</sub> を指定する。

(1) The bank robber is John Thomas.

(2) Who's the murderer? — It is John /me.

#### 2. 同定文 *descriptively-identifying sentences*<sup>(2)</sup>

定義：NP<sub>1</sub> はすでに指示対象が確定しており、指示的である。

NP<sub>2</sub> で記述（同定情報）を追加し、さらに同定を深める。

(3) Who's that man? — That man is John's brother.

- (4) Mike? Who's Mike? — Mike is my brother.

### 3. 指定文 predication sentences<sup>(3)</sup>

定義：NP<sub>1</sub> について特徴・役割・職業などを叙述する。

- (5) John is a teacher.

- (6) John is the cleverest student of them all.

叙述についての問いなど何らかの問いに答える文ではない。

### 4. 同一性文 identity statements

定義：NP<sub>1</sub> は NP<sub>2</sub> と同一人物・同一物であると言い換えられる。

- (7) The Morning Star is the Evening Star.

- (8) Dr. Jekyll is Mr. Hyde.

Declerck では、<who is NP?> は指定文または同定文が答えになる問いとして扱われている。指定文と同一性文はともにどの人であるか、誰であるかが確定した対象について述べたものであるから、どの人であるか、誰であるかの問いの答えにはならないと考えられる。以下では指定文と同定文について考察する。

## 2. 談話モデル理論

### 2.1. 指定文のパラドックス

Declerck では指定文の NP<sub>1</sub> は指示性が弱いとされ、西山 (2003) でも変項名詞句で非指示的であるとされている。坂原 (1990) には指定文という分類項目はなく、同定文に分類されるが、NP<sub>1</sub> は値変化の役割解釈を受ける非指示的名詞句であるという。すなわち、基本的に指定文とはどれであるかが不明である人・もの（非指示的要素）についてどれであるか（指示的要素）を指定する文であると考えられてきた。しかし、指定文の中には、NP<sub>1</sub> が指示的なものがある。

- (9) [指さしながら]小泉純一郎はあの人です。

- (10) [昔の写真を見ながら]私はこれです。

(11) エリザベス・テラーの6番目の夫は、あの男だ。

これらの指定文には  $NP_2$  に指示的要素がきており、東郷はこのような指定文『A は B だ』の B に指示的要素を持ってきたら、A が指示的か非指示的か、役割か値かに関係なく、常に倒置指定文<sup>(4)</sup>として成立する」と述べている(p.33). そして、非指示的であるはずの A に指示的な要素がくるというパラドックスを話者と聞き手の「知識状態の非対称性」から説明した。その説明は東郷の提案する談話モデル理論に立脚している。

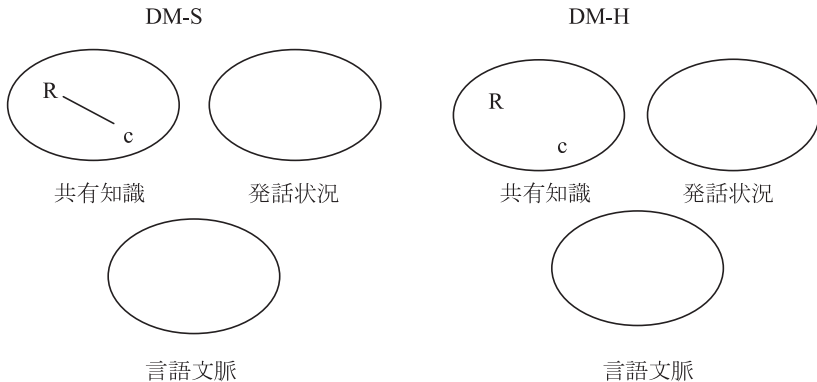
## 2.2. 指定文と談話モデル内に見られる非対称性

指定文は談話モデル理論ではつぎのように説明される。

(12) H : 今のフランスの大統領は誰ですか。

S : 今のフランスの大統領はシラクです。

聞き手 H がシラクを知っているが、大統領であることを知らないとき、聞き手 H の共有知識領域では役割「フランスの大統領」R と値「シラク」c がコネクタで結合されていない。下図が示すように、話し手 S と聞き手 H の知識状態が非対称である。DM-S は話し手の、DM-H は聞き手の談話モデルである。



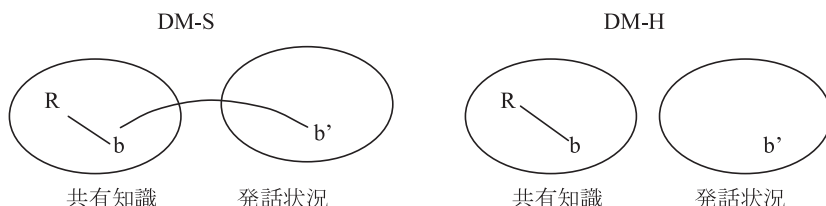
つぎに、話し手 S の発話により、話し手の共有知識領域のコネクタで結合された R と c が言語文脈領域にコピーされ、聞き手の言語文脈領域にもコピーされ

る．さらに聞き手の言語文脈領域から共有知識領域にコピーされ，R と c がコネクタで結合され，シラクが大統領であるという知識が登録される．話し手 S と聞き手 H の談話モデルの要素を結合するので，このような指定文は間スペース的コンピュータ文である．

知識状態の非対称性は，NP<sub>2</sub> が直示的要素（固有名，「私」などの指標詞，「これ」のような指示詞）の場合にも観察される<sup>(5)</sup>．図は話し手 S が発話する前の談話モデルである．

(13) H : エリザベス・テラーの 6 番目の夫はどの人ですか．

S : エリザベス・テラーの 6 番目の夫は，あの男だ．

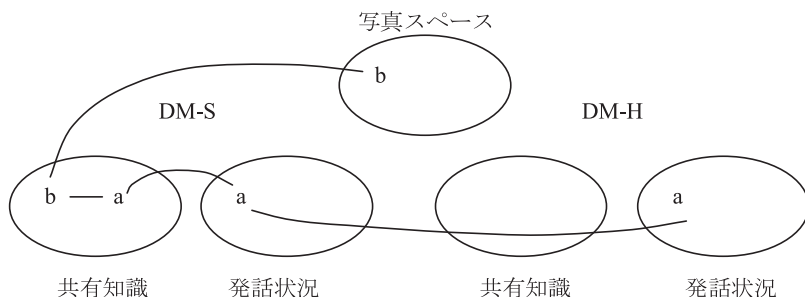


話し手 S，聞き手 H ともにエリザベス・テラーの 6 番目の夫がリチャード・パートンであることを知っているとする．このとき，S と H の共有知識領域では役割「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」R が値「リチャード・パートン」b に役割・値コネクタで結合されている．しかし，聞き手 H はリチャード・パートンがパーティー会場にいるどの人か知らないので，H の談話モデルでは共有知識領域の b と発話状況領域のリチャード・パートン b' が結合されていない．つぎに，S の発話により，共有知識領域の b と発話状況領域のリチャード・パートン b' が ID コネクタで結合される．異なる領域の要素が結合されるので，このような指定文も間スペース的コンピュータ文である．

さらに，写真・映画などのスペースが関与する間スペース的コンピュータ文では，つぎのように説明される．

(14) H : あなたはどれですか．

S : 私は右端の男の子です．



a は「あなた」・「私」に、b は写真スペースにある「右端の男の子」に対応する。話し手 S は a と b が同じ人物であることを知っているので、共有知識領域において a と b がイメージ・コネクタで結合されている。一方、聞き手 H の発話状況領域に a は存在するが、写真スペースの b とは結合されていない。NP<sub>1</sub> が「非指示的であるかのように振る舞うのは、…談話モデルのなかの発話状況領域の『私』と『写真スペース』のなかの『右端の男の子』が、間スペース的コネクタで結ばれるため」である。

東郷は、このようにして、指定文でありながら NP<sub>1</sub> が指示的である場合も問題なく話し手と聞き手の談話モデル内の非対称性から説明できるとした。そして、指定文はいずれも間スペース的コピュラ文であると主張している。

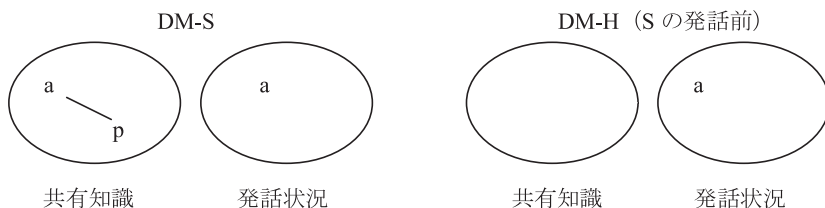
### 2.3. 同定文

同定文は談話モデル理論ではつぎのように説明される。まず、NP<sub>1</sub> の指示対象が発話状況に存在するタイプを見る。

(15) H: あの人は誰ですか。

S: あの人は私の息子のピアノの先生です。

「あの人」a は聞き手 H の発話時に聞き手 H の発話状況領域に存在するが、共有知識領域には登録されていない。話し手 S の発話により、属性「私の息子のピアノの先生」p が付与され、聞き手 H の共有知識領域に属性とともに登録される。

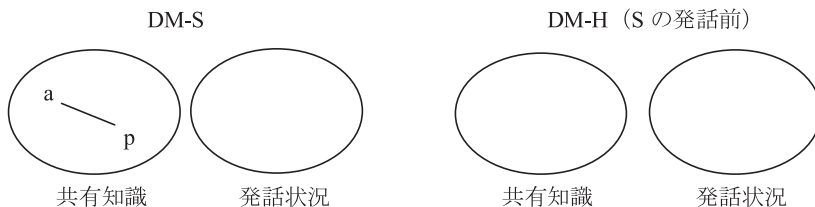


つぎに、NP<sub>1</sub> の指示対象が聞き手 H の談話モデル内のいずれの領域にも存在しないタイプを見る。

(16) H: 山田太郎って誰?

S: 山田太郎というのは被害者の姉の夫だよ。

「山田太郎」 a は話し手 S の発話以前は聞き手 H の共有知識領域には登録されていない。話し手 S の発話により、属性「被害者の姉の夫」 p が付与され、聞き手 H の共有知識領域に属性とともに登録される。



このように、東郷で取り上げられている同定文はいずれも NP<sub>1</sub> の指示対象が話し手 S の発話以前は聞き手 H の共有知識領域には登録されていない。東郷は「措定文は『あなたも私も知っている人・物について、追加的な属性を付与する』働きを持つ文なので、『A は B だ』の A に当たる指示対象は、DM-S にも DM-H にもあらかじめ登録されている。これにたいして、同定文の場合は A の「指示対象は DM-H では発話状況領域に存在するだけで、共有知識領域には登録されていない。…正体が未知のものは知識として登録できないのである。」と述べている。

また、東郷は付与される属性は、「同定に足りるだけの示差的特徴づけをする」ものでなければならないこと (p.18), 付与される属性が「談話との関連性

を強く要求される」こと (p.55) を指摘している。

以上より、東郷によれば、同定文とは聞き手 H の共有知識領域に登録されていない要素 NP<sub>1</sub> について、話し手 S が談話との関連に応じて同定に足るだけの示差的特徴づけをする属性 NP<sub>2</sub> を付与する文であるということができる。

### 3. <qui est NP?>

#### 3.1. 指定文の疑問形の成立要因

東郷の仮説を援用し、指定文の疑問形 <qui est NP?> の成立要因を考察する。東郷の仮説で取り上げられている指定文は2つのタイプに分けることができる。

- 1) 聞き手 H の共有知識領域に役割として存在する要素に対し、話し手 S の共有知識領域に値として存在する要素をコネクタで結合させる。

〔発話例(12)〕

NP<sub>2</sub> が直示的要素の指定文と写真や映画などのスペースが関わる指定文は1つにまとめることができる。

- 2) 聞き手 H の共有知識領域または発話状況領域に存在する指示的要素に対し、それ以外の領域（発話状況または写真スペースなど）に存在する指示的要素をコネクタで結合させる。

〔発話例(13), (14)〕

まず、タイプ 1) について見る。

(19) H : Qui est ton professeur de harpe?

S : Mon professeur de harpe est Madame Nordmann.

話し手 S の発話以前は、聞き手 H は NP<sub>1</sub> が誰であるかがわからない。NP<sub>1</sub> は共有知識領域に役割として存在する。話し手 S の発話によって、聞き手 H は役割 ton professeur de harpe と値 Madame Nordmann を役割・値コネクタで結合させる。このとき、聞き手 H は値 Madame Nordmann を知っていていなくてもよい<sup>(6)</sup>。<qui est NP?> は問題なく用いることができる。

タイプ 2) は指示的な要素 NP<sub>1</sub> を異なる領域にある指示的な要素とコネクタ

で結合するタイプの指定文である。指示的な要素 NP<sub>1</sub> がどの人であるかが直示詞を用いて回答されるような語用論的状况を設定し、どのような状况で <qui est NP?> が成立するかを検討しよう。ジャンという人物を探す場面で、「Qui est Jean?」を用いることができるかどうかを見る。

〔状況1〕聞き手 H はジャンをよく知っている。大勢の人がひしめくパーティー会場でジャンを探す。

〔状況2〕聞き手 H はジャンが大人になってから知っている。小学校のクラス写真に写っている子供たちの中からジャンを探す。

〔状況3〕聞き手 H はジャンをよく知っている。仮面舞踏会の会場にいる大勢の人の中からジャンを探す。

〔状況4〕聞き手 H はジャンをまったく知らない。写真に写っている人物の中からジャンを探す。

状況1, 2, 3では聞き手 H の共有知識領域に Jean が指示的要素として存在する。状況4は、聞き手 H の知らない人が写っている写真と写っている人の名前のリストを見ながらジャンというのはどの人かと尋ねるような場面が考えられるが、Jean は聞き手 H がまったく知らない人であり、共有知識領域にあらかじめ登録されているとはいえない。聞き手 H はリストにある名前を元に、まず Jean を共有知識領域に登録した後、「Qui est Jean?」と問うと考えられる。このように、4つの状況とも、Jean は聞き手の共有知識領域において指示的要素として存在する。これらの問いは、共有知識領域に存在する指示的要素に対応する要素をそれ以外のスペースに求める問いであると考えることができる。

これら4つの状況のうち、状況2, 3, 4では、聞き手 H はそれぞれ写真スペース・仮面舞踏会スペース（発話状況）においてジャンを指し示すことができない。このような状況では、「Qui est Jean?」を用いてどの人がジャンであるかを問うことができる。一方、状況1では、共有知識領域には Jean が指示的要素 *j* として存在し、パーティー会場である発話状況には Jean の対応物 *j'* が存在するが、聞き手 H がパーティー会場で Jean を見つけるまでは、*j*



と j' はコネクタで結合されない。しかし、聞き手 H は自力で Jean を見つけることができ、見つけた途端、j と j' はコネクタで結合される。指定文の疑問形 <qui est NP?> は、状況 2, 3, 4 のように、どの人であるかが追加情報なしにはわからない状況があって始めて用いることができる<sup>7)</sup>。

タイプ 1) の <qui est NP?> は共有知識領域でどの人であるかが追加情報なしにわからないときに用いられる。タイプ 2) の <qui est NP?> は、どの人であるかが聞き手 H のある領域ではわかっているが、別の領域では追加情報なしにはわからないときに用いられる。このように、指定文の疑問形 <qui est NP?> は、聞き手 H の談話モデルのある領域でどの人であるかが追加情報なしには指定できない人についてどの人かを問う文であると考えられる。

### 3.2. 指定文の疑問形と人称代名詞

つぎに、指定文の疑問形 <qui est NP?> で NP が人称代名詞であるときを見る。

〔状況 5〕 聞き手 H は話し手 S が大人になってから知っている。聞き手 H は小学校のクラス写真に写っている子供たちの中から話し手 S を探す。

〔状況 6〕 聞き手 H は話し手 S と電話で話したことがあるが、会ったことがない。聞き手 H はパーティー会場にいる大勢の人の中から話し手 S を探す。見つからないので携帯電話で話し手 S に電話する。

状況 5, 6 では、状況 2, 3 と同じように、追加情報がなければ聞き手 H は話し手 S がどの人であるかがわからない。ところがいずれも « Qui êtes-vous? » を使ってどの人かを問うことはできない。

人称代名詞が 3 人称のときはどうか。

〔状況 7〕 聞き手 H はジャンをよく知っている。聞き手 H と話し手 S はジャンについて話している。聞き手 H は仮面舞踏会の会場にいる大勢の人の中からジャンを探す。

〔状況 8〕 聞き手 H はジャンを知らない。ジャンを見かけた話し手 S は「ジャ

んだ」と言う。聞き手 H は「ジャン？ どの人？」と問う。

状況 7, 8 でも、追加情報がなければ聞き手 H はジャンがどの人であるかわからない。しかし、「*Qui est-il?*」とたずねることはできない。

このように、NP が人称代名詞であるときは、基本的に指定文の疑問形 <qui est NP?> を用いることはできない。これは、人称代名詞で指される人は、スペースが異なっても一貫して同じ人物として認知できることが原則となっているからではないかと考えられる<sup>(8)</sup>。

### 3.3. 同定文の疑問形

東郷によると、同定文とは、聞き手 H の共有知識領域に登録されていない要素 NP<sub>1</sub> について、話し手 S が談話との関連に応じて同定に足るだけの示差的特徴づけをする属性 NP<sub>2</sub> を付与する文であった。フランス語のコピュラ文でもこのことを確認することができる。

(20) H : *Qui est Madame Nordmann?*

S : *Madame Nordmann est mon professeur de harpe.*

聞き手 H は *Madame Nordmann* を知らない。話し手 S は自分を *anchor* とする関係概念を用いて同定している。<qui est NP?> はこのような同定文で用いることができる。

では、同定される要素は聞き手 H の共有知識領域に登録されていないものでなければならないのか。共有知識領域にすでに登録されている要素について属性を付与するという状況を設定し、検証しよう。聞き手 H は *Madame Nordmann* の隣人で、彼女とは旧知の間柄である。H は友人の家で *Madame Nordmann* のポスターを目にする。

(21) H : *Tiens, c'est ma voisine. Qui est donc Madame Nordmann?*

S : *Madame Normann est mon professeur de harpe au conservatoire.*

このような状況では、<qui est NP?> を用いることにはかなり抵抗が生じる。すでに同定済みの人物について誰であるかを問うのは矛盾してしまうからだと考

えられる。このような場合には、*Elle est musicienne? Elle est connue?* のように、すでに同定された要素について属性を追加する指定文が自然である。

ところが、同じ同定ずみの人物でも、つぎの発話では問題ない。同僚（話し手 S）の結婚式の写真を見ていた聞き手 H は友人 Jean-Michel が写っていることに気づく。そこで、同僚が血縁関係を説明する。

(22) S : Jean-Michel est le fils du cousin de l'épouse de mon oncle

Jacques.

H : Je n'ai pas compris. Qui est Jean-Michel pour ton oncle?

この発話では、*pour ton oncle* によってどのような同定情報が不足しているかが明示されている。このように、共有知識領域にすでに登録されている要素であっても、どのような同定情報が不足しているかを限定すると、あらためて同定のための属性を問うことができる。

このように、同定文の疑問形 <qui est NP?> は、基本的には聞き手 H が共有知識領域に登録されていない要素 NP<sub>1</sub> について、語用論的に同定を可能にするような属性を求める文であるといえることができる。ただし、共有知識領域にすでに登録されている要素であっても、あらためて同定情報を必要とする語用論的な強い要因が発生したときには、どのような同定情報が不足しているかを限定することにより、用いることができる。

#### 4. おわりに

本稿では、東郷の談話モデル理論を援用し、コピュラ文の疑問形 <qui est NP?> が指定文と同定文の疑問形として用いられることを考察した。指定文では、聞き手 H の談話モデルのいずれかの領域においてどの人かが追加情報なしにはわからないときに、どの人かを問うために用いられる。人称代名詞が NP 位置にくることはない。同定文では、どの人かはわかっているが、聞き手 H の共有知識領域に登録されていない要素について、他との識別を可能にするよう

な属性を問うために用いられる。

## 注

- (1) Declerck (1988) ではさらに定義文など、4つの分類にあてはまらないコピュラ文が挙げられているが、本稿では触れない。
- (2) Declerck の用語の訳としては「記述的同定文」が適切であるが、本稿では他の先行研究と用語を統一するため、「同定文」とする。
- (3) Declerck の用語の訳としては「記述文」が適切であるが、本稿では他の先行研究と用語を統一するため、「指定文」とする。
- (4) 「倒置指定文」とは日本語の指定文「B が A だ」を倒置した「A は B だ」型指定文のこと。
- (5) 図は藤田が東郷にしたがって作成した。言語文脈領域は省略してある。以下の図においても、言語文脈領域は省略する。
- (6) 知っているときは聞き手 H の共有知識領域にすでに登録されており、知らないときはまだ登録されていない。このように、指定文の答えの文の値と呼ばれている NP<sub>2</sub> は均質ではない。
- (7) 状況 1 では « Jean est où? » や « Jean est là? » などが用いられる。値として存在するジャンについて居場所を問う形をとるわけである。
- (8) ただし、例外的に En 1990, le président a visité la France et en 2005, il a visité le Japon. のように、時間のパラメータが働いて il が先行詞 le président とは異なる値を指すような場合は、この値の一貫性がキャンセルされる。

## 引用文献

- Declerck, R. (1983): “‘It is Mr. Y’ or ‘He is Mr. Y’”, *Lingua* 59, 209-246.
- Declerck, R. (1988): *Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts*, Leuven University Press.
- 西山 佑司 (2003): 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房.
- 坂原 茂 (1990): 「記述文・同定文とフランス語のコピュラ文」, 『フランス語学研究』24, 1-13.
- 東郷 雄二 (2005): 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」, 『指示と照応に関する語用論的研究』, 文部科学省科学研究費成果報告書.

(文学部非常勤講師)